

やましんかわら版は
山新販売店と読者を結ぶ
ミニコミ誌です

NEW

やましんかわら版

山形新聞は創刊140周年を迎えました。

発行部数 9万7,000部

毎月5日発行

新聞休刊日のため12月12日(月)付朝刊はお休みさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。



かわら版編集部

〒990-2323 山形市桜田東二丁目3-8-7
《ホームページ》<http://www.yamashinhanbai.jp/>
《メール》kawaraban@yamashinhanbai.jp
読者お問い合わせ窓口
TEL.023-635-6111 (山新販売内)

連なる紙箱ごと「住み分け箱」。簡単な作成を可能とする器具「小炉具」ごとも。



今月の
いちばん
情報!!

発明で社会へ貢献したい! 長井市在住折紙作家さんの思い。

1枚の紙から、ハサミなどの工具を使うことなく、連なる「紙箱」(※)を作る。長井市在住の折紙作家 孫田勝弘さんは、その特殊な折り方と、「連続紙箱作成具」を発明し特許を取得。さらに箱だけでなく、アルファベットや漢字など、複雑な立体まで手掛ける卓越した技術の持ち主です。いつその方法を思いついたのか、どうやって折るのか。孫田さんが折紙に込めた思いを聞いてきました。

Q、なぜ連続した「紙箱」を作り特許を取得。さらに、立体まで作ったのですか。

▶7年前のこと、机の引き出しを整理するのに良い方法はないかと考えたことがきっかけとなりました。当時、折紙作家になりたい、特許を取りたいという考えは全くありませんでしたが、1枚の紙からいくつもの連なる箱を作れたらきっと便利だと考え、折り方を模索し始めました。そうした中、ある日うたた寝をしていた時に、夢の中でそんな紙箱を可能にする折り方がひらめいたので。

さて、連続した紙箱を作ることは可能となりま

した。しかし、1個作るのにも定規で測ったり折り目をつけたりと非常に手間が掛かる。そこで、次に取り掛かったのは、何とか折り方を簡略化する方法でした。持ち運びも簡単で、また、誰でも扱えるものを作ろうと考え、3年経ったある日、思いついたのが小炉具(ころぐ)だったのです。小炉具とは目盛がついた小さな木型ですが、これを紙に押し当て転がすだけで、簡単に連続した紙箱が作れる器具です。特許庁に申請したところ、今年8月に「連続紙箱作成具」という名前で、折る技術と小炉具の特許を取るに至りました。

ただ、紙箱を作るだけでは自身の探究心が収まらず、それまでに開発した何通りもの折り方を応用し、立体を紙で作りました。上にも下にも、右にも左にも折り進められるのですから、理論上はどんな立体でも1枚の紙で作ることが可能。設計図を描くところから、試行錯誤して完成させるまでの過程も、とても楽しいのです。

一つ一つの発明の瞬間は、ただ一つの目的のためにしか考えないものですが、時間を置いて、他にも使えないものかと、いろいろ想像を繰り返した時、視野が広がっていきました。そして、いつ

しか物事を違う視点からも考えるようになりました。いろいろな物に独特の特性があり、それをうまく使いこなすから成長するわけで、まずは失敗を恐れず、いや、失敗の中に成長の種が潜んでいるものなので、よく目を凝らして行動することが必要でしょう。

Q、孫田さんの折紙にける思いをお伝えください。

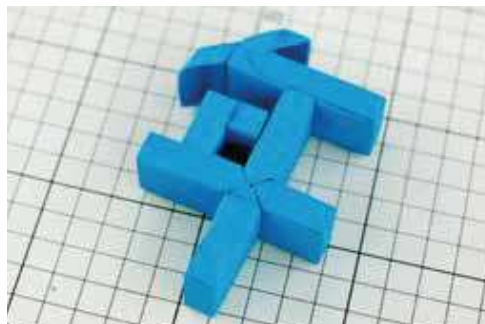
▶私はこの「実用折紙」という折り方で、何かしら世の中のお役に立てばと考えています。自分が作りたい形を実現するには、折り方の基本を知った上でのひらめきが必要です。また、複雑に考え、指先を使うものですから、お子さんの知育、また高齢者のリハビリなどの分野でもきっとお役に立てると考えています。私の発明を少しでも多くの方に知っていただき、社会に貢献することができれば幸いです。皆さんもぜひ、実用折紙を一度体験してみてください。

折紙作家 孫田勝弘

090-1066-0413

Facebook:小炉具工房で検索

※住み分け箱(メイン写真)



左/孫田さんのブース「小炉具工房」。折紙の文字を目印に。

中/折紙の「年」の字は、本当に1枚の紙かと疑うほどの完成度。

右/折紙作家の孫田さん。県内各所で開催されるマルシェに積極的に参加。実用折紙の普及に努めている。